初期武家文化の色彩観
―『蒙古襲来絵巻』に描かれた武装表現を中心に―

九州産業大学 佐藤 佳代
SATO Kayo

ここでは平安時代中期から鎌倉時代中期頃にかけて勃興発展した武家の文化を「初期武家文化」とよぶ。武家文化を象徴するものとして、大鎧と鎧直垂といった甲冑武具が挙げられる。大鎧が発祥し発展する過程は、初期武家文化の発展過程と同時性があり、それが明確に確立したといえるのは蒙古軍が来襲した 1274 年ごろと考えられる。大鎧や鎧直垂は染料や製作技法などを含め公家文化に発祥したものであるため、初期武家文化をはじめに形成した色彩と美意識は公家文化のなかで芽生えたと推察できる。しかしそれを裏付ける当時の色彩を残した大鎧の遺品は少なく、鎧直垂に至っては殆ど存在しないのが現状である。そこで大鎧をはじめ武装した武家が描写されている絵巻物を絵画資料として考察の参考にする。本発表では初期武家文化の確立時期である鎌倉時代後期の甲冑武具描写に詳しい『蒙古襲来絵巻』を中心に、大鎧の威色目と鎧直垂の色彩関係に着目し検証していく。そしてそこにみえる初期武家文化の武装における色彩感覚を探ってみるものである。

『蒙古襲来絵巻』（三の丸尚蔵館）は鎌倉時代に起こった文永の役（1274）、弘安の役（1281）の 2 度にわたる蒙古軍の侵攻を主題とした絵巻である。肥後国の御家人であった竹崎季長が自らの武功を記録するために描かせたという特徴を持ち、武装した多くの武士の姿が写実的に精密に描写されている。本絵巻の原本をはじめ模本や詳細な写真資料を用いて、描かれた武装表現を一例ずつ検証し、データベース化した（後筆や寸断の諸問題も考慮した上で）。同様に参考資料として大鎧の現存作品や、「蒙古襲来」以前の武具甲冑が描かれた絵巻物、軍記物語『平家物語』『源平盛衰記』記述に現れる武装の表現とも比較検証した。その結果、『蒙古襲来絵巻』では赤威と萌黄直垂など、大鎧と鎧直垂の色彩を対比する組み合わせの割合が最も多い結果となった。これは大鎧の威色目だけに注目しても言えることで、平安時代後期に公家が武装する際には「暈し」の効果である匂威や裾濃威の割合が多く見られたが、武家の武装では「単色」や「強い数色」の威色目が多くみられるのである。

つまり、暈しや近似色を多用する色彩観を、襲色目などにもみられるような「公家的色彩観」とするならば、強い色彩同士を対比させる色彩観こそ、新たに抬頭してきた武家の色彩観の特徴を示唆する「武家的色彩観」といえるのではないだろうか。そしてこれは、既存の公家文化の武装色彩観を打ち壊したものばかりではなく、それを革新的に改変した初期武家文化の色彩観でもあるのだ。

以上のように本発表は、『蒙古襲来絵巻』の武装表現を中心に導き出した対比色相に、初期武家文化の色彩観を見出し、考察したものである。